家族結合關係の基礎

―現象學的試考―

田中熙

人は社會的聯關の中にあつて社會的存在者として初めて存在する、彼は樣々の人人と樣々なる仕方で樣々なる社會的交渉關係に立つことにおいて存在してゐる、例へば人は同一の人でありながら子としてはその親或は兄弟と、夫としてはその妻と、友人としてはその友と、敎師としてはその生徒と、隣人としては隣人と、又その他無數のそれぞれ異つた社會的關係に立つが如くに。これら限りなく複雜雜多な社會的交渉の關係は、現象學的に觀て、noetisch, noematisch に、卽ち人間存在の如何なる樣態において相互が如何なる仕方で結合交渉してゐるのであるかの點に關してそれぞれの特質を有してゐる筈である。社會的協同團體についてかゝる觀點をとつて分析を試みてゐる學者に現象學派の一人なるゲルタ・ワルター[※]がある。しかしながら家族結合の關係が多くの社會的諸關係の中において一つの極めて特異的なる結合交渉の關係であることはか樣な分析をまつまでもなく明かなことである。常識的に

數へ擧げても家族關係は例へば人が生れて最初からそれにおいてある關係たる點において、或は諸々の社會的諸關係の原型 Vorbild たる點において、或はそれが肉親血緣の關係として爾他の社會的諸關係を包括すべき所云他人關係に對立せしめられる點において、特殊なる社會的結合の關係であると云はざるを得ない。

（註）* Gerda Walther, Ein Beitrag zur Ontologie der szialen Gemeinschaften, 1923.

家族結合の關係は人間の生誕出生といふ生物的自然的な事實に基づいて成立するところのある自然的な結合關係であるとも云はれる。しかしそれは單なる自然的結合關係にすぎないものではなくして矢張り確かに人間歷史の發展過程において造り出されたる一つの文化產物であると考へねばならぬ、時代によつて又國土によつて家族結合の形態が進展異別してゐることはそのことを證するものである。家族的結合は文化の一產物である故にその生成變展は歷史的社會的な諸條件殊に經濟上政治上の諸制度によつて制約されてゐると云はねばならぬ。しかし家族結合形態の生成變轉に關する社會學的歷史的な研究或は人種學的な研究は吾々が今こゝに企てようとする仕事ではない、吾々がついて觀察し叙述しようとするのは家族結合關係の現實的事象であり現象である。尤も現象と雖も、或は正しい意味での

現象こそは過去の歴史的過程を孕みつゝ無數の社會的聯關の中にあるものとしてしか捕捉されることができない、それ故に社會的歴史的研究によつてでなくては現象の理解觀察は不可能であるとも云はれるであらう。かゝる說に對する辯明は現象學一般の方法論に屬することであり他の機會にゆづることゝして、茲ではたゞ暫定的に次のことを卽ち、ある立場ある制約の下においては社會的歴史的社會的考察から獨立にでも現象そのものを觀察分析叙述することが可能でもあり又現象の理解にとつて極めて重要でもあると考へ得ることを豫想しておくに止めたい。しかし兎も角こゝでは現象の歴史性社會性についての方法論的考察は缺けてゐるのであるからしてそのことを顧慮して吾々はこゝでは家族關係の一般についてではなくてその中にあつても特に最も自然的關係に近いと考へられるところの母と子との關係だけに主として問題を限つて論述したいと思ふ。それのみならず母子關係はまた、家族的結合關係が成立するための中樞をなすところの最も基礎的な關係であると考へられる。

かくて吾々の問題は家族結合關係の中でも最も自然的にしてしかも最も基礎的中樞的な關係である母子關係についてそれは他の諸々の社會的對人關係に比べて

如何なる關係的特質をもつてゐるか、又人間存在の如何なる形式に基づいて如何なる意味で結合成立してゐるかについてである。

一

母子關係の特質と基礎とが吾々の問題である、しかし吾々はそれを歴史的社會的諸制約の下にあるものとしてではなくてそれの現實的事象について觀察することによつて解明しようとする。しからばその事象觀察とは如何にしてなされるであらうか。扨てこゝに問題となつてゐる母とは云ふまでもなく一人の婦人である、しかし彼女は母たる外に同時になほ他の樣々の人であることができる、子も亦ことわるまでもなく一人の人であるが彼又は彼女は子たる外になほ同時にそれ以外の種々の人であることができる。それ故に母はその子に對して唯母として交渉關係するのみならず或は教師として、そのときには子も亦母に對して子としてではなく生徒として相關係する場合や、或は母がその子に對して友人として、子も亦そのときには母に對して友人として相關係する場合や、或は母がその子に對して他人の如く冷淡に、さうしてそのときには子も亦母に對して他人の如く外々しく相關係する場合やなど、か樣に樣々な場合が彼らの長い生涯の中には屢々あることであらう。しか

し此らの交渉關係はたゞ世間的に母又は子として呼び慣はされてゐる人と人との間に生ずる通俗的意味における母子關係の中に包括されてゐるにすぎない關係であつて、嚴密に云ふならばそれらは假令母と呼ばれ子と呼ばれる人々の間において生ずる交渉關係であるとはしても結局或は師弟關係或は友人關係或は他人關係に歸屬すると云はねばならぬ。母と子との關係が一つの現象、本質として純粹に表現されるのは母は單なる一人の婦人或は樣々の可能なる他の人としてではなくて自己自身を特に母として理解し存在してゐる時、さうしてそれと共に子も亦單なる人或は自己にとつて可能なる他の樣々の人としてではなくて自己自身を特に人の子として理解し存在してゐる時に、その時にその兩者の間において現れるのであると考へねばならぬ。或は一層正確に云へば人が眞の意味における母子關係においてあることを理解するときに初めて、母は自己自身を母として、子は自己を特に人の子として理解し存在するのであると云はねばならぬ、母が母たるときにのみ子が子として現れる、子が子たるときにのみ、母が母として現れる。兩者は單に論理的相對概念として相關的なるのみならず現象的にも亦相關的である。*

(註)* 此の點についてはアルターの上掲書 S. 61-62 參照。

それ故に母子關係の現象學的特質及びその基礎は單に世間的に母と呼ばれ子と呼ばれる人々の間における樣々なる交渉關係をたゞ列擧することによつては求められない。それはたゞ母が人間或は女性としての自己自身の可能的諸存在の樣態の中で特に母として理解し存在し、子も亦人間としての自己自身の可能的諸存在の樣態の中で特に子として理解し存在してゐる時に、左樣な固有な意味での母と子との間に成り立つ特異的な交渉結合の關係中において見出されねばならない。若い母親がその嬰り兒を撫愛哺育してゐるやうな場合、或は幼い兒がその母親に縋りつき賴り切つてゐる樣な場合、などはかゝる嚴密な意味での母子關係が純粹に表現されてゐる例であるだらう。何となれば母の側においてはその現前の子に對する樣樣の關係交渉勞作に沒頭してゐて、自己がたとえば夫の妻たること、召使の主人たること、ある知己の友人たること、隣人に對する隣人なることなど凡ての自己の母として以外の可能的存在樣態を忘れてゐる、又子の側においては嬰り兒としては未だ精神的諸作用が顯現して居らず從つて自己の存在並びにその樣々の樣想について知ることなく唯生み落された人の子としてそこに存在してゐるばかりであり、又幼兒の場合においては彼は未だ家族以外の諸々の對人關係にあることなくして主とし

て母に對して母の子としてしか存在してゐないからである。更に一つの具體的な例を以て示さう。

今自分の前に生れて間もない嬰り兒が居るとする、成程それが無心に笑ふ時、或は泣き聲を立てるときには吾々も亦ある情意的な反應を感ずるであらう、しかし若しその兒が自分と何の關はり合もない兒であるとするならば自分とその嬰り兒との交渉關係はそれ以上に及ぶことはないであらう、のみならず時としては嬰り兒の赤黑い皮膚や押しつぶされた樣な顏は醜い肉體として吾々に或る嫌惡の感を催させるにことさえあるだらう。これ自己とその嬰り兒とは何の關はり合もない他人關係において立つてゐるからである。しかも他人關係であるにせよ、自己に對するものが若し思想や情意を互ひに相通じ合ふことのできる成人であるならば吾々はその人と友人知己その他の複雜なる交渉關係に入り込むことができるでもあらうが、嬰り兒の場合にはそれがまだ主として肉體的存在においてしかない幽かな意識的存在にすぎないがためにそれとは唯外的な空虛な交渉關係をしか持つことができないのである。然るに之れに反してその嬰り兒に對する人がその母親であるとせよ、その場合には事情は全く一變して兩者の間には、他においては現れ得ないやうな

複雜親密な交渉關係が成り立つであらう、卽ち嬰り兒はその母にとつては單に肉體的存在にすぎないものとしてばかりでなく他の人々と等しい或はそれにも優つて確實顯著な存在者として現れ、又母親はその兒を撫愛し養育し世話するであらう。これ嬰り兒に對する人がその母であり彼はその兒に對して自己を特に母として母子關係において立つてゐるからである。

母子關係の眞の特質とその結合基礎とはか樣な事例において現れてゐるような最も嚴密な意味における又最も純粹な表現における關係的事象について、求められねばならぬ。吾々の現象學的考察の究極はかゝる事象に迄迫りゆきそれにおいても亦 erfüllen されねばならぬ。しかし乍ら又他方、吾々がついて觀察すべき事象を母子關係のかく嚴密なる意味における又最も純粹なる表現における事象にのみ限るといふことは餘りに狹い限定であるとせねばならぬ。何となれば母子間には、左樣な嚴密な意味での母子結合交渉の關係的特質又は基礎から派生してではあらうが確かに尙他に樣々な表現形式をとる特異な又注目すべき交渉關係があるからである。或は世俗的な意味における母子結合交渉の關係の中にも屢、嚴密な意味でのそれの關係的特質が基礎背景として存してゐることをうかゞわしめるからである。

それ故に吾々は嚴密な意味での母子結合關係の基礎、その純粹なる關係的特質を鮮明するためにはそれに到達すべき通路(ツーガンク)を世俗的な意味における母子關係の關係的事象の觀察に求め、それから出發して順次進まねばならぬと考へる。

母子關係は先に述べた如く家族關係の中においても最も自然的な關係である、そのために普通一般には母子關係とは先づ肉體的な關係であると考へられてゐる、しかし乍ら肉體的な關係或は抑々身體性肉體性 Körperlichkeit-Leiblichkeit といふ概念は一面では曖昧な他面では從つて又充分には明かにされてゐない概念であると思はれる。それ故に吾々は之れに代えるに母子關係の外的形式成的特性といふ言葉を以つてし、通常の意味における母子關係において現れる包括的な關係的事象を唯外的に觀察することによつて、母子關係が他の諸々の社會的對人關係に比べて如何なる形式的特質をもつてゐるかを最初に略述しておきたい。是によれば母子關係は次の樣な外的形式的な關係的特質を持つてゐると思はれる。

第一に母子關係は單一特定的非代換的な對人關係として他の社會的諸關係から區別されると考へられる。凡ての人は單なる人ではなくて一定の個人である、人は一定の個人である限り彼は彼自身の特定なる唯一人の人をしかその母として持つ

てゐない、凡ての人々にとつて彼れの母たる人は時の永遠を以てしても代へることのできない唯一人しかない。他の社會的對人關係においては人は例へば友として、師として、弟子として、組合員として隣人として、或は兄弟、夫妻としてゞさえもなほ幾人もの多くの人を持つことができる。此らの社會的對人關係はその本質上關係の成員として單一特定的な個人を要求することなく、從つて關係の成立とは獨立にその成員を自由に代換交替せしめることが可能である、此らの社會的結合關係は個人の存在にとつて遊離的であり又開放的である、それらは結局關係の成員の多數性 Vielheit において成り立つてゐる。之れに反して母子關係は關係の成員が單一特定的なること又その成員の非代換的非交替的なることを不可缺の條件としてゐる、それは特定個人の存在にとつて固定的閉合的なるところの、又關係の成員をそれ以外の人によつて代換することを本質的に許さないところの關係である。

第二に母子關係はその成員にとつて原始的原型的な關係であることを特色とする。母子關係は、特に子の側におけるその母との交渉關係は彼れの存在と共に原始的に始まるところの關係である。之れに對して他の多くの社會的對人關係例へば夫婦關係友人關係、師弟關係などは人の存在のある時期において始めて結合成立す

る。ウインデルバントは一般に社會的結合團體を二種に、卽ち意欲せられたる或は造り出されたる團體 ein gewollter od. erzeugter Verband と、見出され或は與へられたる團體 ein vorgefundener od. gegebener V. との二種に分ち、家族關係はその後者に屬するとしてゐる。* 母子關係はその成員の存在と共に與へられるところの原始的關係である。

(註)* Windelband: Einleitung in die Philosophie. II, Aufl 1921. S. 306

第三に母子關係は更に直接的非媒介的な關係であると考へられる。此のことは直ぐ前の母子關係の原始性卽ちそれは成員の存在と共に與へられ見出される關係であるといふ事から續くのであるが、母子關係の結合成立のためには何ものゝ媒介をも必要としない。意欲せられ造り出されたる關係においては少く共成員の意欲の存在、相互目的の合致などを關係成立の條件として豫想せねばならない。之れに反して母子關係は、例へば友人關係、組合關係等々とは異つて思惟の確認、感情の評價、意欲の合致などを根抵或は媒介者として要求することなしにそれら凡ての彼方において直接的原始的に成立してゐる。シェーラーの言葉をかりるならば、それは——シェーラーは母子關係、家族關係を Gesellschaft に對する生活協同體 Lebensgemeinschaft なる概念の中に含ましめてゐる——「その成員の相互了解にとつて表現から體驗へ

の如何なる推理をも要せず、眞理の共通認識にとつて如何なる眞理標準、如何なる人爲的用語をも要せず、共通的意志の形成にとつて如何なる約束又如何なる契約をも必要しないやうな關係である」。*

(註)* M. Scheleri Der Fomalionus in der Ertirk und die Materiqle Wetethik. II Aufl, 1921. S. 548

母と子との結合關係は他の社會的對人關係に比べて大體かゝる形式的外的特質をもつてゐると思はれる。ところで母子關係において觀られるかゝる外的形式的特性はそれにふさわしい實質的な關係特質を內面的にも亦持つて居ねばならぬと思はれる。上に擧げたような外的形式的特性において現はされてゐるところの母子關係の內的實質的特性は如何なるものであらうか、又それは如何にしてかの嚴密な意味での母子結合關係の本質と基礎とを豫想してゐると考ふべきであらうか。

(註)* 尤も專門の社會學者は母子關係又は家族關係について更に詳しく更に異つた仕方で特質づけてゐるかも知れない、しかし乍ら此の論文においては殘念ながら一般に社會學者の說述を參考することできなかつた。

二

家族間特に母と子との間の親密特異な實質的關係について常識は極めて簡單に

それは愛の關係である、しかもそれの愛たるや相互を連ねる斷ち難き血緣の意識に基づいてゐる、母と子との關係は肉親の愛によつて結びつけられてゐる關係、血の連りの關係として諸々の他の社會的對人關係から區別せられると說くのが普通である。常識のかゝる見解は極めて單純である、さうしてそれで充分明白なことゝとして通用してゐる。しかし吾々はそれに止ることなしにそこから出發してその理由權能を更に分析規定し、以つて母子關係の實質的特質とその關係的基礎とを明かにせねばならぬと考へる。先づ第一に母子間が愛によつて結合されてゐるとは如何なる意味であるか、如何なる意味で又如何なる愛によつて母子關係は成立、現象してゐるであらうか。

論究に先立つて豫め一般的に愛の本質についてマックス・シェーラーに從つて述べておくことが必要であらう。シェーラーに依れば愛とは單なる同情とは違つてある價値ある對象に向けられるところの作用である、しかしそれは對象における價値の認識や評價や或は尊敬と同視せらるべき作用ではない、又對象の價値性、幸福性を希求意欲することでもない。彼の定義によれば「愛とは價値を荷つてゐる具體的個別的な各對象がかれにとつて又彼れの理想的本性上でき、る限り最高なる價値へ

それにおいて到達するところの運動 Bewegung である、或はそれはそれにおいてその對象が彼れに特有な彼れの理想的本質を獲得するに至るやうな運動である。」※或は換言すればある對象を愛してゐるとは、その對象において已に現實的として與へられてゐるそれの價値に對つて尙、その與へられてゐる價値よりもより高い可能的な價値への運動、志向が附け加はるといふことである。※愛とは對象においてそれがもつてゐるよりもより以上に多くの價値性質に眼を開かしめ、又それにおけるより低い價値から多くのより高い價値を創造するところの作用である。かくして愛とは一つの創造的な意味 schöpferische Bedeutung をもつてゐる、人は存在の前に認識が先行せねばならぬことを知つてゐる、しかしシェーラーによれば價値の前に更に愛が先行せねば、ならない、價値あるが故にその對象が愛せられるのではなくして愛あるが故にこそ始めて諸々の多くの價値がしかもそれらのより高い價値が當の對象の荷ふ性質として數へられることになるのである。シェーラーは愛の概念をかくの如く規定して次にかゝる愛の形式と樣相 Formen und Arten der Liebe を分類してゐる。即ち人間諸作用に關しての彼獨特の區別と考へられる三形式—生命的或は肉體作用 vitale od. Leibakte 純心理的或は自我作用 rein psychische od. Ichakte 精神的或は人格作用

geistige od. Personakte の三作用に對應して、愛の作用も亦生命的或は情慾的愛 vitale od. Leidenschaftsliebe 個體的自我の心的愛 seelische Liebe d. Ichindividuums 及び人格の靈的愛 geistige Liebe d. Person の三形式に分けられる外に尙、心情活動の性質の相違に本づいて母性愛、子の愛、父愛、鄕土愛、等が愛の樣相として區別され***と說くのである。

(註)* Scheler; Wesen und Formen der Sympathie. III. aufl. 1926 S. 187

** ditto; a. a. O. S. 177

*** ditto: a. a. O. B. IV.

シェーラーの愛に關する說は一つの注目すべき說と云はねばならぬ、しかしその中でも特に彼が價値の前に愛を先行せしめたこと、プラトーと共に愛における創造的な意味を認めたこと、さうして愛を三つの形式に分類した企てなどは吾々の强い興味を引く點である。是らの點を心に藏めつゝさて吾々は彼によつて愛の一つの樣相として區別し出されたる母性愛親子愛については更に深く詳しく自から追究せねばならぬ。その場合常識は母と子とが先づ存在しその兩者の間に愛といふ不思議な作用があつて、それに基づいて母子間の種々なる特殊的な交涉關係が生ずるかの樣に說く。しかし乍ら吾々によれば後にも述べるが如くに愛とはそも〳〵母

子がそれによつて存在するに至るところの存在の一つのあり方であり、かゝる母と子との間における種々なる特殊的結合交渉の仕方を總稱するものが愛の概念である。母と子とが先づ存在してその間に愛の作用があり、そのことによつて彼らは母又は子として交渉關係するのではなくして、母と子とはある特異なる愛において始めて存在する、さうしてその存在するとは交渉しつゝ存在してゐるのであると考へる。それ故に思ふ、吾々は母子愛の特質を考察するにあたつては母子愛に基づくとされる母子間の樣々な特殊的な結合交渉の仕方を觀察することからして、下から歸納推知するの途をとらねばならないと。內面的實質的に觀て母と子との間には關係交渉の如何なる特質が觀られるであらうか。

第一に特に母と子との間にはそれ以外の對人關係においては存しないやうな程度の親密さ、熟知さ、馴々しさの感がある。かような感情は友人との間、或はその他の他人關係においても存しないことはない、しかしそれはある特定の範圍內又ある程度までに限られてゐる。更に家族の內において父と子、夫婦、兄弟等の間には著しく強い親密さ、熟知さ、隔てなさの感がある、しかしこれも亦それ〴〵特定の範圍と程度とにおいてある限界をもつてゐる。これらに對して母子間におけるその感にはか

かる限界制限がなくその最高の極限においては兩者は全然合一であることも亦屢屢可能である。先に眠つたり泣き立てたりしかしない嬰り兒と雖もその母親にとつてだけは彼女自身の存在と相共通結合してゐる位にまで親しく近く知れ切つてゐると云つたが、之れはたゞ主として肉體的存在においてしか存在しない嬰り兒といふ特例を擧げることによつて母子間に於けるかゝる親密さ、熟知さ、合致さの感が如何に強く異常であるかを示したものである。母子間における第一の關係的特質たるかゝる親密性、熟知性、合一性は云ふまでもなく一般に人と人との間の心的交渉の通路と考へられてゐるところの合一感Einspühlenや追感Nachfühlenや或は同情Mitfühlenに基づくであらう。さうしてシェーラーが說く如く同情を追感が基底づけ更に追感を合一感が基底づけてゐるであらう。かくて合一感が人々における心的交渉關係の基底極限となるべきものであるが、母と子との間のかの親密さ、熟知さも亦合一感を基礎として居りそれにおいて結合の極限に達し、又それによる結合交渉において母子關係は最も純粹に表現せられると考へられる。それ故に吾々は母子關係の基礎がそこで最も純粹に顯著に現れるところの合一感については結末に至つて更に詳しく述べることゝして、茲では唯追感、同情についてだけ簡單に觸れることに

したい。追感とはディルタイも云ふ如く*ある人の心の中に自己を移し入れて、その人が當面してゐる環境狀況に對して取り得べき反應態度の樣々なる可能性を自己自らもその人と共に考慮想像することであらう。母と子は通常同樣なる環境々遇に當面しつゝ存在と生活とを共にしてゐることによつて恆に互ひに最も良き追感者であるといふことができる。次に同情とは他人の喜び惱みなどの體驗內容を自己も亦等しくいたわりつゝ體驗することであらう、シェーラーによれば「他の人によつて分たれたる苦惱は半減し、他の人によつて分たれる喜悅は二倍する」。Geteiltes Leid überhaupt ist halbes Leid, geteiltes Freud ist doppelte Freud.** それ茲に母との關係においてある人の子、子をもつてゐる母はかゝる意味において恆に自己の最も良き追感者、同感者を傍らに現實に持つて居り、それと喜び苦しみを共に分ち荷ひ、互ひにいたわり慰め合ふことができるのに對して、母を地上において己に失つて了つた人或は子との關係においてあらざる人は左樣な人を自己の傍らに見出すことができぬと云はねばならぬ。それらの人々が多く屢々淋しげに不安げに見えるのはかゝる事情に本づくのであらう。

(註)* Dilthey: Schriften. Bd. VIII. 1927. S. 214 ff.

第二に母子間にはかくの如く顯著な親近さ、熟知さ、合一さがあることに本づいて彼らの結合關係の內部においては各自の獨自的價値性は互ひに中和されて居り、超價値的超對立的な絶對的肯定作用によつて彼ら相互の存在並びにその結合關係が成立保證されてゐるといふ特質を有してゐる。母子の間にはシェーラーの云はゆる他人相互間の立場たる grundloses Misstrauen に對して理由なき信頼 grundloses Vertrauen があり、※從つて疑惑や臆側などが生ずることはない。是れ母子關係は前節にも述べた如く原始的直接的な結合關係であつて思惟や情意の作用を媒介として始めて結びつけられる關係ではない、これに反して所云他人關係は思惟や情意によつて媒介されて造り出されたる關係である。ところで思惟や情意は對立的な價値に對する積極的肯定作用又は消極的否定作用としてのみあらはれる。さうして他人結合の關係とはその中、相手の反價値に對する否定作用によつてゞはなくて價値性に對する肯定作用を基礎媒介として始めて成立するとせねばならぬ。それ故にか樣な他人關係においては相互的に各自の價値性、その評價批判などいふ作用が關係成立の根抵に條件として豫想せられてある。それは成員相互の價値性の是認肯定によつ

※ Scheler: Sympathie usw, S. 115.

て始めて結合し、非認否定によつて離散せられるところの關係である。これに反して母子關係は何らの媒介基礎をも豫想せずして與へられてゐる關係である故に關係の成立と存在とにとつては、その關係においてある人々の獨自的價値の批判、或は評價、從つて又肯定否定の撰一的作用は何らの影響をも持たない。母と子の兩者間においては相互が人間として荷つてゐるべき諸々の獨自的價値が中和されてゐて neutralisieren 無記的 indifferent, gleichgültig となつてゐる。母子關係は互ひに相手の獨自の價値性、その評價値批判を超えたところにおいて成り立つてゐる超價値的、超對立的な關係である。フェンダーの言葉をかりればそれは超對立絶對的な感情的肯定作用 Akt der gefühlsmassigan Bejahung によつてその存在が保證 bemächtigen されてゐる關係である。※母子間の信頼、或は隔てなさはかゝる事情に本づく。尤もこゝに價値の中和、無記といふもそれは相互に獨自定的なる價値の否定又は無視を意味するのではない、唯母子關係の內部にあつてはその獨自的な價値及びその評價が相互に括弧の中に入れられて妥當しないことを云ふだけである。それ故に家族間、母子間においても屢々相互的に肯定的或は否定的な評價批判がなされる、しかもそれは互ひに親密熟知的である故に、他人間におけるよりも一層無雜作に又無遠慮に。しかし

その評價批判は唯相手の Sosein についてのみであつて Dasein については何ら妥當しない。相手の存在從つて相互間の關係存在はそれによつて毀損壞滅せしめられる恐れはない。價値の批判と評價とに基づく社會的交渉關係においてのみあることは人に累しさ、不安、動搖、時には脅威をさえ感せしめる。母を持つてゐる人の子はそれらの關係の中に避難することにかゝる累はしさ、不安、動搖、脅威から漸く或は長く免れることができる。又人の子が知らず〳〵に陷つた墮落、過つて犯した罪惡などの故に社會的諸關係からは指彈擯斥されることありとしても彼は尙その超價値的超批判的な母子關係においては依然として保たれ、そこで彼は變りなき休息と慰籍とを見出すことができる。母を地上に失つてゐる人の子がその社會的交渉存在において多かれ少かれ屢々不安げにして脅かされ易く又疑ひ惑ひがちなのはかくの如き人の缺除に本づくと考へられる。彼は自己の獨自的價値の失はれむことを恆に恐れてゐねばならぬ、彼は自己の存在を絕對的に保證して吳れる人を持つてゐないのである。

(註)* Scheler: Formalismus usw. S. 550–551.

** A. Pfänder: Zur Psychologie der Gesinnungen. I. Teil II. Abdruck. 1922 S. 369.

第三に母子間にはかの親密さ、熟知さ、合一さがあり、更に又彼らの間では相互の存在は超價値的超對立的な肯定作用によつて保證せられその間では各自の獨自的價値が中和的無記的となつてゐるといふことに基づいて、母と子との間には最後に價値體系の共通合一、共同責任の連帶性 Solidarität といふ特殊な關係が現れると思はれる。その意味は次のようである、母と子との何れもは人間としてそれ〴〵獨自の價値體系、それ〴〵一つの目的聯關體をなして生きてゐる。しかし母と子との兩者は他人關係においての如くに各自獨個のそれとして孤立分離してゐることなしに極めて自然的に相互の價値體系性、目的聯關性を共同融通し合つてゐる。彼らは各自の利害休戚、毀譽褒貶に關して相互に有無相通じて共同連帶の責任を負ふて存在生活する。彼ら中の一人の價値は積極的なると消極的なるとを問はずそのまゝ直ちに他の一人のそれとして融通推轉する。しかも母と子とは連帶的共同責任においてある故に一方の積極的價値性、例へば勳功、貢獻などについては他方はそれをそのまゝ又自己のものとして共受分有するに對して、その消極的價値性例へば恥辱、缺陷などについては他方はそのまゝそれを自己のものとして自己も亦それの補償回復の責任に任ずる。しかのみならず母子間におけるかゝる價値の融通性、共同目的の

聯關性、責任の連帶性は當然のことゝして極めて自然的に行はれて、そのために相互に何の代償も要求されることがない。母と子との關係においては凡てのことが非代償的非交換的又無條件的自然的に行はれる。之れに比べて所云他人關係にあつてはどうであるか、彼らは相互の根抵的な分離孤立において、卽ち唯自己獨自の價値體系者としてのみ存在する、各自たゞ自己自身の積極的消極的な價値性について責任を負ふばかりであつて、故なくして他人の價値性について參與することはない。他人の間においては一人の功績と恥辱とは唯その人だけのものであつて他の人によつて自然的直接的にそのまゝ分たれることはない、否時には他人間にあつては一人の功績貢獻は却つて他の人々によつて嫉視毀傷せられ、一人の失敗と屈辱とは他の人々によつて嘲笑せられることさえなきを保せない。人の世はかくの如くにまで屢々冷酷殘忍であり得るからである。母子間においては各自の目的聯關、價値の體系は合して一つの共通的共同的體系となつてゐる故にその中の何れかゞ良しとすることに二人して當り、又その中の一人が爲し得ないことに對してはそれが如何に勞苦を伴ふことであれ他方はこれに當る。母が身を以つてその子を育て・かばひ、護り、敎へること、子がその母を慰め養ひ安んぜしめることなどの凡ての交渉關係は

かゝる事態の具體的な現れである。母なき人の子、子を持たぬ母が不幸であると云はれる一つのわけはかゝる事態の缺けてゐることに由るのであらう。

扨て吾々は母子關係の事實について觀察することによつて大體上に擧げた如き實質的な關係特質があると考へる。常識が簡單に母と子とは特異なる愛によつて結合交渉存在してゐると云つてゐる事柄は分析すれば上述の如き特異な種々な交渉關係として列擧されるであらう。さうしてか樣な三つの關係的特質に强いて概念的構成を附與するとすれば、吾々は大體第一の特質は知的作用に、第二のは情的、第三のは意志的作用に屬するとも云ふことができるであらう。さうして又實際之れら凡ての關係的特質が等しく唯一の母子間の特異なる愛の作用に本づくことは容易く考へ得られることである。先づ第三の價値體系の融通、共同責任の連帶性が愛に基づくことは深く說くまでもあるまい、母子間には愛ある所に非代償的に相互が相手の利害休戚に關して自分も分與共有するのである。愛があるが故にこそ必然的に身を以つて相手の價値の確保、增進を希求するに至るのである。次に母子間では相互の存在とその關係とが超價値超批判的な肯定作用によつて保證されてあるといふことも亦愛に由來すること明かである。その存在とは愛によつての保證で

ある。プェンダーも愛の情懷を分析して愛あるところでは Wärmeude Belebnugskraft と內的合一の感 innere Einigungsgefühe とそうして Daseinsermächtigung 或は gefühlsmässigen Bejechungsakt とがあると云つてゐる。* それに加へてプェンダーはその中の內的合一の感においては愛の深きに向つての完成 Volleudung nach der Tiefe があり、感情的肯定作用においては愛の高きに向つての完成 Volleudung nach der Höhe があると說くが** 母子間において相互の特に母の側における精神的發達に伴つて兩者の價値性目的性は愈々複雜に個別分離するにも係らず、その分離個別を超えて母子愛が維持せられるときには愈々高き母子愛の完成が見られるであらう。プェンダーの此の分析は又最後に母子間における親近熟知の感が愛に基づくことを確かめて吳れる、母子間における內的合一の感、親密熟知の稀なる程度は母子愛の限りなき深さを示すものである。シェーラーも亦一般に Mitgefühl の基礎には愛があるべきこと、愛なきところにはそれは現れ得ぬことを說いてゐる。***

(註)* Pfänder: a. a. O. S. 364 fb.

** ditto; a.a. O. S. 373.

*** Scheler; Syneapathegefülf, S. 166.

かくの如くにして上に擧げた樣な母子間の關係結合の諸特質は凡て愛に基づくとして、かゝる愛による母子の關係はその時にも述べた如く結局第一の特質たる兩者の親近さ、熟知さ、內的合一の感を以つて基底としてゐる。しかも母子間の此の親近さ熟知さは更に兩者の合一感 Einsfühlung によつて基礎づけられ又それにおいて可能的極限に達する。しかのみならず此の Einsfühlung において母子結合の關係又母子愛はその最も純粹なる表現を見出すのである。吾々が初めに最も嚴密な意味での母子關係が、しかも最も純粹に表現せられる場合として擧げた事例例へば生れたばかりの嬰兒に對して生ずる母における結合交涉の關係などは卽ちかゝる合一感をさすものである。それ故に母子間の此の合一感について最後に次章において特に詳述する必要があるであらう。けだし母子間における愛に本づく結合交涉の關係の最も根本的な最も純粹な特質と基礎とはその事象において見出されると思はれるからである。さうして此の合一感についてはシエーラーの獨創的な興味ある研究から數へられる點の多いことを豫めこゝに感謝しておかねばならない。

三

嬰兒に對する母の Einsfühlung についてシェーラーは次の樣に說いてゐる、卽ち母

とならんことを期待しつゝある婦人はinnerorganische Ekstasis*の夢みる如き狀態にある、さうしてその子を生み落して了つた後でも尙母においてはその子との間の前意識的生氣的な統一がまだ全くは斷ち切れてゐない、その故に母とその子との間には單なる共感や追感を超えて更に深い合一感――かゝる合一感をシェーラーはidiopathisches Typusに屬するといふ――が存して母はその子が自己を全く同一の生命存在であるかの如く感ずる。それのみに止らず母と子との間には科學的には未だ明かにされてゐないが、兩者の生命律動の共通對應――例へば嬰兒の週期的な飢餓感と母親における乳房の充實緊張感との間における如き――があり母はその子の生命經過に對する有機的徵表體系organische Zeichensystem für der kindlichen Lebensverlauf**の如きものを所持してゐるとさへ說いてゐる。これらの說述にはシェーラーの纖細なSinnが溢れてゐるがしかし吾々にとつて一層有益に又興味深く考へられることは彼がこれらの具體的事例を通觀した後で一般にEinfühlungは人間の存在構造のある場所"Ort"において現れ、しかも特定の仕方でのみ現れると說いてゐることである。*** 彼によれば合一感は人間の身體的存在についても又は精神的人格的存在についても現れることはない、それらは凡ての人々にとつて全く獨個的なその間に

合一を許さない存在であるから——。それが現れるのは有機感覺や局所的感情感覺を含むべき肉體と、精神的個人格的存在との中間 Zwischenreich においてに限られる。卽ち生命に關する本能や情慾や諸々の衝動——食慾、性慾、支配慾など——等を包括するところの心的領域＝生意識 Vitalbewusstsein 或は生中樞 Vitalzeutrum においてのみ合一感は現れる。のみならずそれは(一)任意的に或は聯想的機械的にではなくて自働的 automatisch に現れ、(二)精神的人格的領域並びに肉體意識的領域とにおける諸作用が人において消失した時でなくては現れないといふ特性をもつてゐる、とかくの如く說く。

(註)* Scheler; a. a. O. S. 27–28.
** ditto; a. a. O. S. 29.
*** ditto; a. a. O. S. 35–38.

母子の結合關係、愛の關係はシェーラーが如此特色づけた合一感に本づく、しかもそれにおいて母子結合關係の關係的諸特質は最も純粹な表現と最も究極的な基礎とを見出すであらう。さうしてこの事に所據することによつて吾々は今迄それを目指して分析し來つたところの母子間結合交涉の眞の關係的特性とその基礎とを

結論として次の樣に規定することができるであらうと考へる。

即ちシェーラーの合一感の事象について說く所を參考して云ふならば、母の子に對する愛とは殆んど種族維持の本能と分ち難い程に本能的衝動的に、その意味で自働的に發動する。又凡ての精神的個性的諸作用を滅却したところにおいて無思惟的、無批判的に、その意味で無我的に發動する。母親は彼女の本能の迸るがまゝに身を任せ內なる力に驅られて、判斷し熟慮し選擇し抑制することなしにその子を愛する。母の愛は無我的である故に、時にはそれは地上において最も純粹なる從つて聖なる神の愛に最も近い愛であると云はれることがある、しかしそれと共に又それは衝動的無思惟的である故に母の愛は時には盲目的であると云はれる。吾々が先きに母子の交涉關係を特色づけて或は超價値的超批判的なりとし、或は非代償的、直接的、自然的なりとしたことは母子愛のかゝる事情に基づくのであると考へられる。母子は更に人における生意識、生中樞において現れる、母親を驅つて衝動的自働的に又無我的にその子を愛せしめないでおかないところの內なる力とは、母としての存在の內奧におけるかゝる生意識である。人の子を生むものは母親である、彼女の心の中には顯はに或は祕かに生命創造の原始力が昔のまゝに永遠に又普遍的に躍動

してゐる。母の愛はかゝる生意識に起源してゐる故に一方ではそれはある程度の肉體的情慾的性質を加味してゐる――シェーラーの云ふ情慾愛の樣態に屬する。――しかし又母の愛は生意識の原始的創造力に起源してゐる故に他方ではそれを傍觀する人をしてその愛の背後に神の創造的な存在と姿とを、卽ち人類始つて以來限りなき人間生命の創造を繰り返しつゝあるある偉大なる原始的普遍的生命力の滂薄たる躍動を感せしめる。母をしてその子をかくも强くかくも無理由に愛せしめるものは彼女自身ではなくてその背後に遍通なる創造的原始的生命力であるとも云ふことができる。女性が最も嚴密な純粹な意味において母であるとは生意識におけるかゝる原始的生命力に恒に新しく自己の存在を沒却してゐるといふことであつてそれ以外の存在形式においてではない。同じく母と子とも亦最も嚴密な最も純粹な意味において生意識におけるかゝる原始的生命力の立場で恒に新しく結びつけられてゐる關係であつてそれ以外の結合關係ではないと考へねばならぬ。

かくの如く說いてくることによつて吾々は今までそれについて言及することのなかつた所云血緣關係といふ常識的概念を茲に想ひ起すものである。常識は母子關係、更に一般に家族關係における特異なる交涉關係を理由づけようとしてそれは

血緣の連り、血緣の愛によつて結びつけられてある關係である、それは同一の血の流れによつて結合せられたる、血肉の溫みを通じての關係であると說く。母子關係が一つの宿緣として、或は人の力によつては斷ち難き絆として考へられるのはその關係が前にも擧げた如き認識や情意の批判評價を超えた彼方において原始的直接的に結びついてゐるとの事實に基づくのであると思はれるが、かゝる事實の基礎として常識が單に生物學的意味のみならず一種神祕的な意味をも含んだ血緣の連りの概念を以つてするのは母子關係が今述べたように萬物生命の原始的創造力によつて結合されてゐることによるのであらう。尤もかくの如く血緣の意識をもつて生意識に基づくと解しても尙人は生意識の概念も亦血緣の意識と同じく一つの神祕的な概念にすぎぬではないかと云ふかも知れない、事實吾々がそれから敎へられたシェーラーにおいてもその生意識の概念については他の人間存在の諸形式たる肉體意識や心的自我意識或は精神的人格などの概念に比べて一段と漠然たる規定しか與へられてゐないようである。或は更に人は母子結合關係の基礎又は母の愛はかの生意識の生命創造的原始力の發動に起源すると說くことを以て一つの形而上學說にしかも舊きそれに奔るものと難ずるかも知れない。吾々はこゝでは生意識

と他の人間存在の諸形式についての authropologisch な考察には立入らぬとして唯以上の樣な鮮明が何らの神祕的意味をも含まず、又何らの形而上學的說明でもないことを簡單に辯明するであらう。

吾々によれば母子愛がそこから發動し母子の關係がそこにおいて結合せられるところのかの普遍的創造的なる原始的生命力とは、單なる思辯によつて考へ出されたる超越的概念にすぎないものではない。それは人々各自が自己自身における地上的生命の中樞なる生意識的存在を理解するときにそれと共に理解せざるを得ない一つの現象である。しかもその生意識とは如何なる人と雖も――凡ての人が彼れの母をもつてゐる――彼れを生み出して呉れた母の生產力との關係において、卽ちかの創造的な原始的生命力に基づく彼自身の地上的生命の中模の自覺において直知し又直知せざるを得ないところの現象的存在形式である。尤もその間に次の樣な事情はあるであらう、卽ちかゝる生意識としての人間存在の特殊なる形式は人間における男と女との兩性の中で特に女性にとつて基礎的意味を有し、從つて特に女性によつて直知理解され易いといふ事情はある、それ故にかの生意識における原始的生命力及びそれに起源する本能的無我的なる愛は成程男性にとつては緣遠き

不可思議なる又神祕的なる現象であるとはしても女性にとつては何の不思議さも神祕さも無い現象であると云はねばならぬ。實に母の存在、又母たるべく運命づけられてゐる女性の存在にとつてはかの生意識、それにおける創造的原始的生命力、又それに基づける愛は不可缺の存在要素であり、又存在論的用語をかりるならば一つのExistential*であるとも云ふことができよう。

以上吾々は母子間の合一感を以つて母子結合關係の純粹なる表現と見做しそれにおいて母子關係の基礎を考察して來た、母子間の交渉關係に現れる諸特質は凡てかゝる基礎的合一感に本づくのである。卽ち母は上に述べた樣な母としての存在的特性からしてその子に對して樣々なる特異なる交渉をするのであり之れに應じて子も亦母に對しては樣々なる特異な子としての交渉をなすに至るのである。そうして家族的結合關係全般も亦、それは一方では多分に社會的歷史的諸制約によつて條件づけられてゐるとはしても結局はかゝる母子結合關係を中軸とし基礎として構成せられ又上述母子間において見られる如き結合交渉の諸特質を多かれ少かれ分有しつゝ相關係し結合してゐると云はねばならぬ。しかし乍ら母子關係の外に尙父子、夫婦或は兄弟等の諸關係を含み又歷史的社會的な諸條件に絕えず支配影

響されつゝあるところの家族結合關係全般については更に總括的な研究にゆづるであらう。

最後に吾々は以上の如き論述を通觀してそれは廣い意味では現象學的考察と呼ばれ得るにしても、存在論的に云へばそれはハイデッガーの所云 ontologisch な研究ではなくて ontisch な或は精々で vorontologisch なそれに止つてゐると云はねばならぬ。しかしこれ以上の研究も吾々は後日に待たねばならない。尤もこゝに簡單に次の樣なことを附け加へておくことは吾々の以上の考察にとつても亦無用なことではないであらう。卽ち人はある社會學者にならつて一般に家族關係をもつて血緣の意識又は群居の本能によつて結合成立した關係であると考へてはならない。正しくは次の樣に云はねばならぬであらう、人々は生れて間もない時は自然と人間、無生物と生物とを區別せずして凡て經驗するものを生命あるものとして觀る、さうして凡て生命あるものゝ中から彼れは生命なき自然を區別することを知るに至るのであると云はれてゐるが、* それと同じく人々は生れたばかりでは家族と所云他人との區別を知らない、無邪氣な嬰り兒は周圍の凡ての人に向つて母や父と等しく親しみある人として微笑みかける。嬰り兒は元來自己自身と自己以外の人々との區別

をさえ知らないのである。彼は漸くにして自己と自己以外の人々との區別を知るに至る、しかしその時彼はその自己を自己の家族とは未だ分離區別しないで自覺するのである、さうして彼れは自己自身をも一體的に含めた自らの家族に對しては外的なる人々を所云他人として意識するのである。家族關係は他人關係に對立してのみ意識せられる、此の二關係は全く相關係的であつて一あつて初めて他の關係が意識せられるのである。家族關係とは血緣の意識又は群居の本能によつて構成せられる關係ではなくして人が生れて最初に結合せられてあり、さうして後に至る迄も區別されずして殘される關係である。幼兒は他人關係に對して家族關係を意識的に區別した後で更に彼自身の存在形式の個別分化が進展するに伴つて彼はその家族關係の中についても親、特に母親とそうして母以外の家族員との存在的特質とを區別する——例へば自己がその胸に抱かれ自己がその乳房を吸ふ特定の人として。人々は凡てその家族の中についても特にその母のみを自己自身の特性の如何なる個別分化にも係らず、自己と斷ち難く區別し難き特殊的存在として最後まで自己と共に殘すのである。此の意味で母子關係とは人間存在の最初において存在し、※さうして最後に至つて意識せられるところの對人關係であるといふことができ

る。ところで母子關係とは先に述べた如く Vitalbewusstsein に基礎をおく關係である、それ故に生意識は人間において最初に存在し又最後において意識せられるところの存在形式であるといふことができる。人間の靈的存在が人格における神性に窮るのと同じくその地上的存在は生意識の Abgrund に窮るのである。

(註)* Scheler; Sympathiegefribl usa S. 275. シェーラは茲で小兒における外界對象についての Lernen とは Beseelung ではなくて Ent-seelung であると云つてゐる。

** Dilthey; Schriften, V. Band S. 125.

最後に一言。母子間には上に述べた樣な特異な愛に本づく特殊な交渉結合の關係がある、一般に愛があつて始めて人生は麗はしく豐かに又生氣づけられると云はれるがその母とかゝる特殊的なる結合交渉の關係において立つてゐない人の子、その母からのかゝる異常なる愛を享受することのない人の子は不幸であると考へられる。その母を地上において已に失つてゐる人、或はその他の事情によつて母の愛に缺除してゐる人、――かゝる人が極めて多いことは悲しい哉――が多くの場合淋しげにして落つきなく疑ひ惑ひ易くして不安げに觀えるのはそれらの人々には母の愛に基づく特異なる交渉結合關係が缺除してゐることによるとは已に述べたと

ころである。彼らはその愛の空虛缺除を意識的無意識的に樣々なる仕方で他の何物かによつて代え充さうと焦り求める、しかも母の存在とその愛の特殊性の爲に時には又彼らの無知のために彼らはその空虛を殘りなく充し得べき代償物を他に見出すことなく苦しむのである。しかし乍ら母の存在と愛とは如何に特殊的であるにせよ、その缺除、空虛を代り充すことが全然不可能であるとは考へられない、他の存在、他の愛によつてある程度までは代り充すことが可能であると考へられる、卽ち例へば夫婦愛――そこにはシェーラーも云ふ如く Einsfühlung があり得る*――によつて、或は精神的文化的活動――學問の研究、藝術的創作、或は經濟的政治的活動など――によつて、更に最も完全には神との交渉――神の愛と母の愛とが諸種の點で共通類似してゐることについては上に述べた――によつて。

(註)* Vgl. Scheler: Sympathiegefühl. III. Aufl. S. 24-25.

附記 本稿の論旨は要するに極めて動搖的である。未だ究め得ざる事柄、論じ至らぬ問題に滿ちてゐること、又所論の曖昧不徹底も少くないことを知つてゐる。例へばかの生意識 Vitalbewusstsein の概念(私は是れを一つの限界概念と解したいのであるが)についてや、又それと他の意識的存在形式或は愛の作用との關係についてなどの究明は、家族結合關係の內部における母子關係、父子關係乃至夫婦兄弟等の關係のそれぞれの關係的特質、並びに一般に家族結合關係の生成變轉に對して背景となつてゐる社會的歷史的諸制約についての考察などに先行してなされねばならぬであらう。しかし乍ら本稿は一つの試みとしてでも角纏め上げたものであり、暗に葬るに忍びないで厚かましくもそのまゝ生まれしめたものである。多くの事柄は今後の展開に待ればならぬ。それ故に一層大方の御示敎を得れば幸福の至りである。